

長谷川等伯研究における諸問題点をめぐって

出光美術館 黒田泰三

能登の地に生まれ京都に活躍の場を移した長谷川等伯（天文8・1539～慶長15・1610）は、たびたび狩野永徳とならび称される桃山時代を代表する絵師である。とくにその「松林図屏風」（国宝・東京国立博物館）は、日本における水墨画を自立させたとまで評され、日本絵画史上最高傑作のひとつとして知られる。等伯は現在最も注目される絵師の一人と言ってよい。

その等伯の芸術生活は以下のように概観できる。

- 1) 能登における絵仏師時代（「信春」印の使用） 20歳代～30歳代初期
- 2) 京都における等伯前期時代（牧谿様式踏襲から脱却期） 50歳代
- 3) 京都における等伯後期時代（雪舟様式の自覚期） 60歳代（66歳法橋叙位まで）
- 4) 京都における等伯法眼時代 60歳代～72歳（67歳法眼叙位後）

桃山時代、地方出身の絵師が京都に上り活動をおこなったにしては、異例と言うべき明確さでその生涯を追うことができる。この内容は先学による研究成果にもとづき構築されてきたものであり、その間にはさまざまな問題点の抽出とその解決がくり返されてきたことは言うまでもない。しかし、熱い議論の季節を過ぎ、今や等伯研究者のほとんどがこの内容を全面的に是認し、語るようになっている。2年後の2010年には歿後400年の節目を迎えることになる等伯は、今後ますますその注目度を高めていくことであろう。そしてその際、彼の生涯は地方の絵仏師から中央画壇へと進出し成功を収めたという、いわばサクセス・ストーリーの側面が大いに語られていくことになるろう。

しかし、上記1～4の各時期の繋がりについて問題点が全くないとは言えない。たとえば、等伯は信春と名乗り能登地方で絵仏師として活躍をしていたことになっているが、『丹青若木集』『扶桑名公画譜』『画乗要略』といった江戸時代の記録では信春は等伯の子供とされ、『本朝画史』では信春は春日絵所の絵師と記されており、信春と等伯は別人とみなされていた。ところが昭和13年に土居次義氏によって「日堯上人像」（本法寺）が見出され、その書き込みの解釈によって「等伯・信春同人説」が提出されて以降江戸時代の諸記録は否定され、この同一人物説は一部の研究者を除きひろく認められてきている。しかし、発表者には様式論において同一人物と認めるのに躊躇せざるを得ない。問題点は完全に解決しているとは思えないのである。土居氏も自論において、新資料の出現によっては訂正をおこなう考えのあることを明記している。あるいは60歳代、雪舟様式を強く自覚した「自雪舟五代」という署名を用いるのであるが、「五代」という根拠に乏しいことや、晩年にはわずか一年足らずで法橋から法眼になったことなども問題点たり得ると思われる。

そこで本発表では、かつて指摘された長谷川等伯研究における問題点のいくつかの再点検および新たな疑問点の提示をおこない、現在確立されたその芸術生活のいっそうの補強を目的としたい。